

「クツログ」小考

山中 玲子

融は各流とも小書演出が非常に多い曲だが、今回は、現在最もポピュラーで、他の早舞を舞う曲とも共通の小書「窠(クツログ)」について考えてみたい。

左に掲げるのは鴻山文庫蔵『正徳宝生流仕舞付』の「舞クツログの事」という一節である。対象曲として当麻・融・海士の名を挙げた後、次のように言う。

二段目の跡、三段目の跡にあり、今ハ惣じて三段目の跡にてくつろぐ事也。囃子方も巧者にて此訳しりたる時、興に乗じて其時の首尾によりくつろぐ事也。楽屋にて云合と云事なし。又、前の能に何にても橋掛へ行たる事あらば舞のくつろぎ、心有べき事也。其時ハ鼓の流すを正面に出、下二居、三段目の跡ならば、長絹の袖、右にてかざしながら出て下二居、右の膝つき、其ま、袖かざして居、太鼓の諸撥に成たるを聞立て、常ノ通に舞ふ事也。(二行割注)クツログハ、太夫ヨリ、囃のヨク出来たるを馳走ニクツログ事也。

クツログの入る場所は本来二通りあったが、

この頃三段に入る形に固定しつづつあったらしい。橋掛へ行くのが原則ではあつても、そのことがクツログの本質的なではなく、場合によつては本舞台で下居することもあつたようだ。「ゆつたりとする・休息する」という「くつろぐ」の原義がまだ生きていたわけだ。それは、「囃子の上手を聞かせるために大夫が少し舞を休むのが本義」という伝承が残っていることから窺える。また、クツログはシテが興に乗つた結果のもので申し合せてやるものではないこと、このようなクツログの本義を知っている囃子方も知らない囃子方もいたらしいこと、なども読み取れる。全体として、クツログという習事の意味が微妙に変化して行く時代、新旧の過渡期であるような印象を与える記述である。

より古い『随形』(鴻山文庫蔵)では融の習事として「笏之舞」「思立之出」と、イロエの入る演出に触れているが、クツログの名は、他の早舞物を含めてもまだ登場しない。

このことと、正徳の段階で「申し合わせ無し」とことさら説かれる習事であることを考え合わせれば、本来、クツログはその場の興が乗れば何にでも入る(もちろんいくつかの例外はあろうが)習事であつて、特定の曲の替演出として書き留めるようなものではなかつたということではないだろうか。

さらに、『随形』よりも少し遡る『八帖花伝書』第五卷には次のような記事もある。

舞のうちに、そらだちといふ事あり。これは稽古にて成がたし。…そのうへはやしなど下手にて中々なりがたし。上手のそろひにて、囃子も乗り仕舞も折にふれたりと、大夫心おもしろき時立物なり…。いかにもたをやかに、さすがしなをあらせ立つ。其時はやしも大夫のふりを見て精を入る。

右は舞一般に関する記事で、早舞に限らないし、省略した部分にはそのままでは意味の通らない箇所もあるのだが、「何もせず立っている」という「そらだち」の語意や傍線部の記述などからは、これがクツログと非常に似た効果を狙つた演出であることがわかる(思想大系『古代中世芸術論』の頭注が邯鄲の空下りのこととするのには従えない)。『正徳』でも、前の能が橋掛を使った場合は本舞台正先で下居すると在つたように、クツログの核が「橋掛へ行くこと」ではなく「囃子

を聞かせるために休むこと」なら、何もせず  
にじつと立っていたとしても何ら不思議は無  
かる。が、一方、じつと立っているのでは  
形になりにくいということもある。『八帖花  
伝書』の右に続く部分でも、目を開けて立つ  
と「足もと定まらず腰すはらず心静まらず姿  
もぶしほなる物」になると言っているが、そ  
の困難さのため、橋掛を用いるかあるいは下  
居する形へと変化して行ったのがクツロギな  
のではないだろうか。演出に即興性の残って  
いた一時代前の習事「そらだち」が、次第に  
対象を限定し、ノリも良く囃子の技量を聞か  
せるのに適した早舞に特定の習事になってい  
くという流れは、そう不自然ではないと思わ  
れる。

このようなクツロギの習が現在の小書演出  
としてのクツロギへと変化していったプロセ  
スは辿れないが、宝暦頃までには現在に近い  
意識の演出として確定していたようだ。観世  
元章からの伝授事を記した『習事伝授書留』  
(鴻山文庫蔵)は「バンシキ早舞クツロギ舞  
方とほる・海人・当麻・玄上」という項で次  
のように言う。

三段目地頭ワキ座ヨリスグニ橋カ、リ行、  
マクギハにて小廻リ右ノ袖ヲ返し面ツカ  
イ、それより静ニ舞台へ入、太コ座ヨリ早  
ク四段目へうつる。又三段目取リテシテ柱

先ニテヒラカツニ、三段目扇子ヲ左リへ取  
リスグニ左リへ廻リ、橋掛リ行クツログ。  
それより舞台へ入り角取りワキ座行、地頭。  
跡同じ事。

三段のどこにクツロギが入るか、二通りの演  
出があるようだが、『享保十二年奥書下掛り  
型付』(鴻山文庫蔵)にもほぼ同じ説がある  
からこれは元章独自のものでなく、一般的に  
二様だったらしい。それよりも注目したいの  
は、『伝授書留』がシテの型も詳しく説くこ  
とである。こうなるともはや、囃子を聞かせ  
るためのお休みという意識ではなく、シテが  
どう動きどういう型を見せるかが重要になっ  
てくる。習事の焦点は、興に乗ったらシテが  
くつろいで囃子に花を持たせることがあると  
いう故実ではなく、クツロギの時はこう舞う  
という型にあるのだ。『正徳』の段階では  
まだ残っていた「くつろぐ」の原義に通じる  
意識は消え失せ、早舞の型をより面白く見せ  
るための特殊演出に変貌しているのである。

こうしてクツロギが定型を持った小書とし  
て確立すること、この時代に舞の途中で橋  
掛を使う新たな小書演出が多く登場すること  
とは、無関係ではあるまい。先後関係を含め、  
検討してみる必要がある。

(東京大学留学生センター講師)